

# イタヤガイ調査（昭和41年度）

小林 啓 二

鳥取県沿岸海域におけるイタヤガイ *Pecten (Notovola) albicans* の分布は県下全域にみられるが、これまでに何回か偶発的な大発生をくりかえしている。最近では1964年に泊～青谷沖を中心に中部沿岸漁場で599トンの漁獲がみられた。ひきつゞき1965～66年にかけて美保湾沖から島根半島沖にかけてイタヤガイの漁場が形成され1965年に853トン、1966年には397トンのイタヤガイが漁獲された。

このように本県沿岸海域のイタヤガイは1964年から66年にかけて局部的な漁場形成がくりかえされているが、漁場範囲については移動がみられる。イタヤガイの漁場形成要因等についてはこれまでに調査が行われていないが、本年度はイタヤガイの分布範囲および分布密度等を調査するほか、イタヤガイの移動や成長について基礎的な資料をうるため標識放流調査の方法等について検討した。

## 調 査 方 法

漁場調査は試験船第2鳥取丸（19.86トン、D100PS）で貝けた網を曳航し、イタヤガイの入網個数を算定した。また個体測定はノギスで殻長を計測した。調査海域ならびに期間は図1および表1のとおりである。

標識放流についてはセメント（歯科医）による標識票塗着方法を用いた。

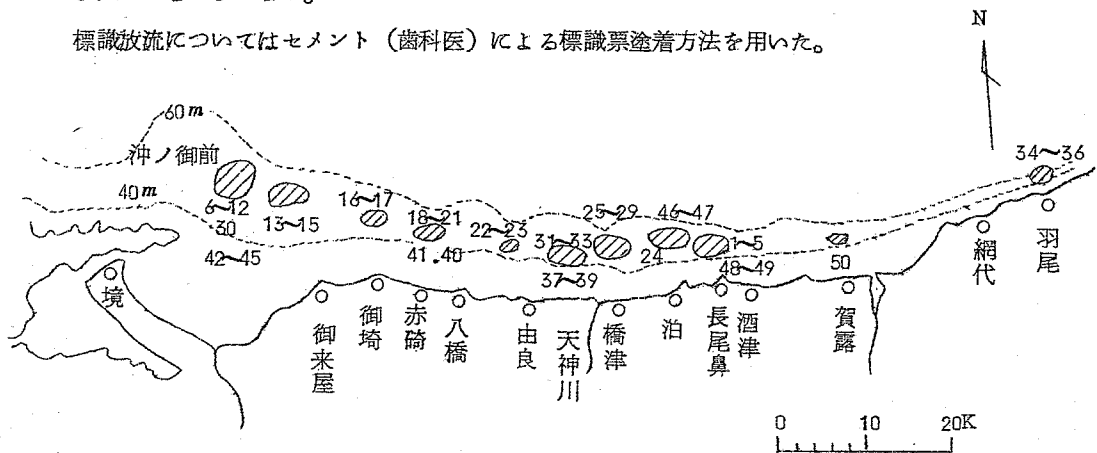


図1 イタヤガイ調査海域図

(数字は st.No)

表1 イタヤガイ漁場調査結果表

st No	調査年月日	調査海域		曳網方向	漁獲量 個	備考
		曳網場所	水深 m			
1	41. 4. 9	長尾鼻沖	52~43	ESE	10	漁獲量=
2			48~46	E	3	個数/ 30分曳網
3			52~44	E	6	
4			52~48	E	21	
5			48~46	E	1	
6	41. 4. 12	沖ノ御前北東	50~53	E/S	60	
7			57~57	E/S	1	
8			50~52	E/S	135	
9			52~49	E/S	21	
10			52~50	E/S	15	
11			53~52	E/S	29	
12			49~47	E/S	16	
13	41. 4. 13	御来屋沖	52~51	E	6	
14			49	E	12	
15			48~46	E	10	
16		御崎沖	51~52	E	1	
17			56~53	E	1	
18	41. 4. 20	赤崎沖	52~51	E	0	
19			48	E	0	
20			46~43	E	0	
21			47~48	E	0	
22		由良~天神川沖	51~52	E	0	
23			46~44	E	0	
24	41. 6. 7	泊小浜沖	50	E	4	
25		橋津沖	52~54	E	276	
26	41. 7. 4	橋津沖	42	E	25	
27			45	E	37	
28			46	E	185	
29			44	E	123	
30	41. 7. 14	沖ノ御前北東	50	E	200	
31	41. 11. 24	橋津沖	44~45	E	21	
32			43	E	19	
33			50~48	E	6	
34	42. 3. 14	羽尾沖	44~40	E	3	
35			50~47	E	6	
36			48~40	W	11	

st No.	調査年月日	調査海域		曳網方向	漁獲量 個	備考
		曳網場所	水深 m			
37	42. 3. 26	天神川西沖	48	E	20	
38			46~45	E	32	
39			55~54	E	3	
40		八橋沖	47	E	12	
41		赤碓沖	48	E	29	
42	42. 3. 28	沖ノ御前北東	46	E	37	
43			48~46	E	57	
44			46~47	E	77	
45			48	E	65	
46	42. 3. 29	泊 沖	50	E	2	
47			46	E	2	
48		青谷沖	46~42	E	0	
49			50~48	E	0	
50		賀露沖	48~50	E	16	

## 調査結果および考察

### 1. 漁場調査

調査海域は図1に示すように羽尾鼻沖から沖ノ御前島沖まで延50点について、1966年4月、6~7月、11月および1967年3月に行なった。貝けた網の曳航は水深40~57mの砂および砂礫質帯を、等深線にそってE~W方向に曳航した。単位時間当りの入網個体数は表1に示すとおりで、イタヤガイの生息分布は県下全域にみられるが、沖ノ御前島水深50~52mおよび橋津沖の水深44~46m、52~54m海域でやゝ濃密群がみられるほか分布密度はまばらである。分布域の水深は海域により異なるが45~55mの水深帯が分布の中心で、帯状に分布し局部的に濃密な生息分布がみられる。

### 2. 殻長組成

調査海域別のイタヤガイの大きさは図2および図3に殻長組成を示したが、殻長は60~120mmの範囲で、調査域によりモードは異なっている。調査域別の殻長組成についてみると、羽尾沖(水深40~50m)では殻長90mm以上の大型群のみであるが、分布密度の高い沖ノ御前島沖(水深46~50m)では殻長70~90mmの範囲で大型群はみられない。また橋津沖では殻

長80~90mmにモードがみられる。全域的にみると分布密度がまばらな海域では大型群が多く、分布密度が高い海域では小型群が多くなる傾向が認められる。

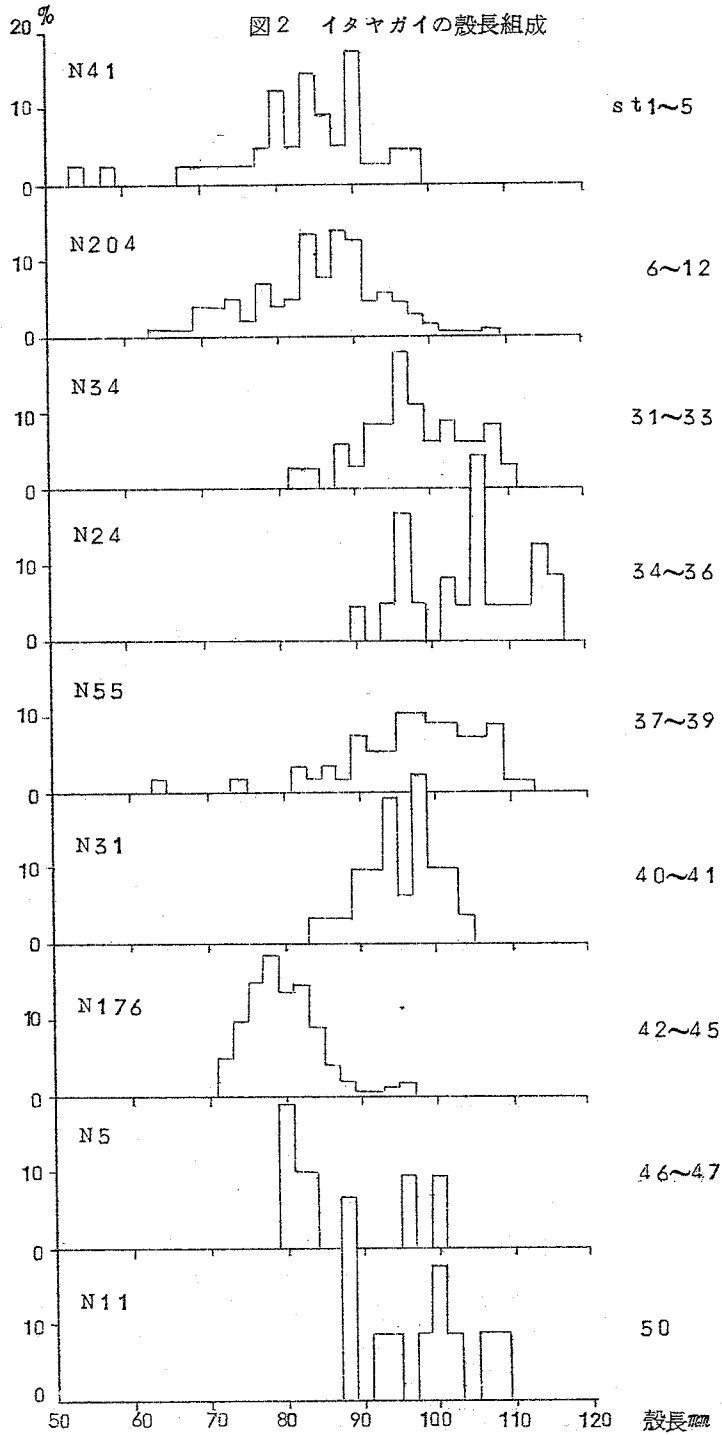
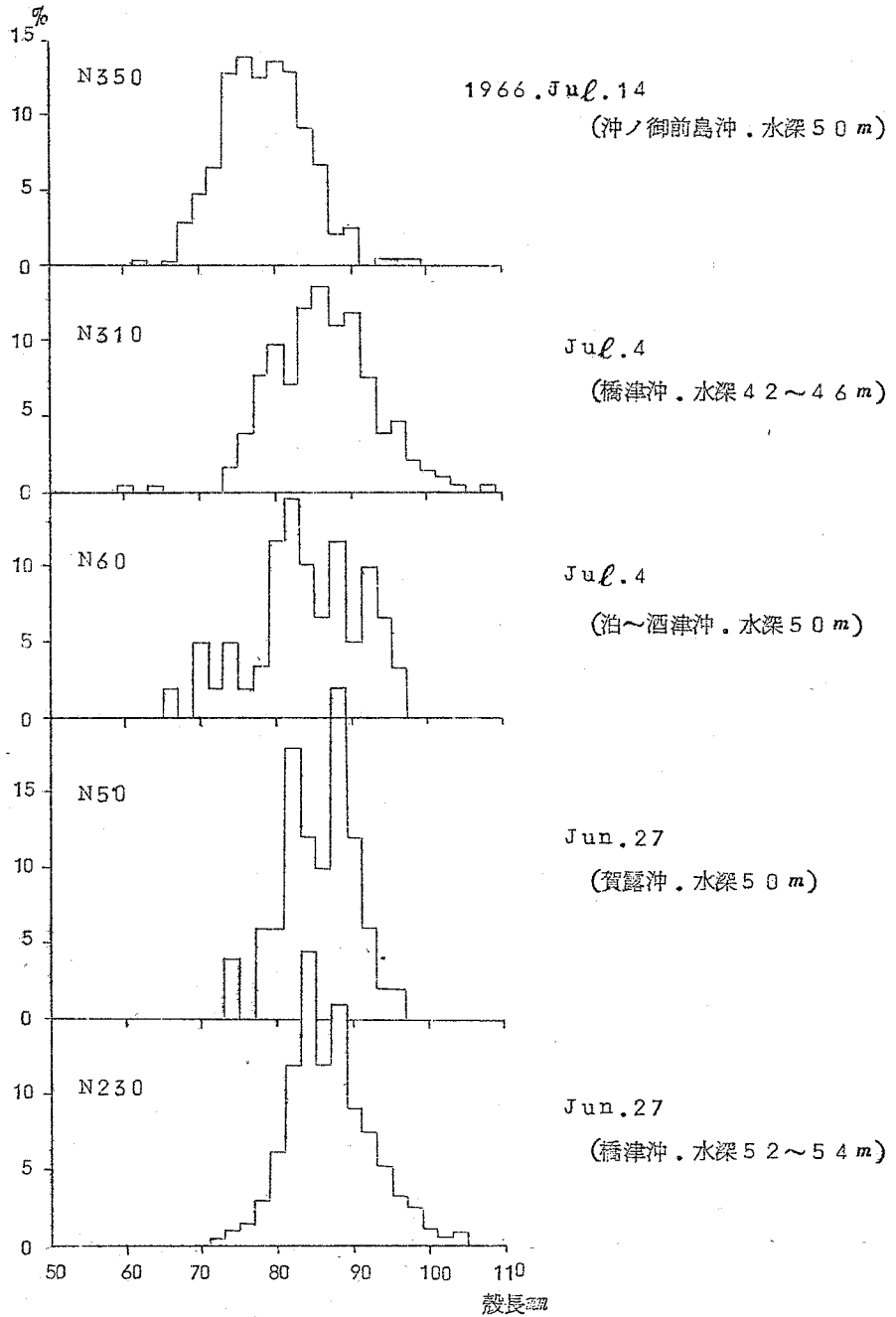


図3 放流イタヤガイの大きさ



### 3. 標識放流

イタヤガイの移動および成長をみるため標識放流調査を行なった。標識方法はイタヤガイの成長について検討するため個別的にマークする方法を試みた。標識票を装着する場合、標識票の脱落の問題のほか、標識票装着による死亡の問題等についても検討しなければならない。標識票装着にセメントを用いる場合、速乾性が要求されるが歯科用用のセメントを用いた。

今回の標識放流調査は漁場調査で採捕したイタヤガイを用い、橋津沖および沖ノ御前島沖を中心に1000個放流したが、放流時期や場所については表2に示すとおりである。

放流イタヤガイの大きさは図3に示した。

放流イタヤガイの再捕については1967年3月末まで1個も再捕されていない。標識放流調査については、標識方法、時期等を検討し42年度以降も継続実施するので別途報告する。

表2 標識放流状況

放流年月日	放 流 位 置		放流個体数 個	備 考
	場 所	水深 m		
41. 6. 27	橋津沖	52~54	230	st25 (漁場調査st)
7. 4	橋津沖	42~46	310	st26~28
6. 27	賀露沖	50	50	st25で漁獲したもの
7. 4	泊~酒津沖	50	60	st26~28 "
7. 14	沖ノ御前北東	50	350	st30